

# キリスト教的人間論からキリスト教教育の課題を問う

—— パーソナル・スペースの手法を用いて、人間の在り方を探る ——

中 居 伊久緒\*  
倉 戸 ツギオ\*\*

## はじめに

神のために生きるとは、佐藤（1989）によれば、「神に喜ばれるような生活をする事」である。それは、単に、神を信じることでことたりとするものではなく、生活のなかで具体的に実践をすることを意味している。すなわち、神を信じるといいながら、自己中心的に生きることを意味していない。それは、如何に、神を中心に生きることができるといふ在り方の問題である。神を中心に生きるとは、神の計画に従って、神によって与えられた器のままに、積極的に生かされ、用いられようと絶えず心がけることである。しかしながら、そこには、神を中心に生きるキリスト者として自己に対峙するというきびしい自己との戦いがある。

そこで、キリスト教主義や立場に立つ学校の教師・青少年教育や野外活動の指導者・聖職者などのキリスト教教育の担い手である者、すなわち、働きかける側も、一方、児童・生徒や青少年・成人などの働きかけられる側も、神のためにどのように生きるかを謙虚に、かつ誠実に模索しつづけなければならないのである。そして、種をまく責任と役割を果たさなければならないのである。その責任と役割を果たすためには、信仰に基づく在り方の課題に取り組む必要がある。そのためには、まず、自らキリスト教的人間論を問い、展開する必要があると考えられる。それは、バルト（Barth, K., 1953）によれば、「神を認識し、イエス・キリストを認識し、人間を認識し、神とイエス・キリスト、そして、人間との関係を認識すること」である。

そこで、本論文では、このキリスト教的人間論を論究し、問いかけつつ、現在のキリスト教教育の問題と今後の課題を模索しようとしたものである。具体的には、第1点は、キリスト教教育について論究し、第2点は、キリスト教的人間論を展開する。そして、第3点は、パーソナル・スペース（対人距離空間）の視点より、人間の在り方の問題を明らかにし、今後の課題を示したものである。

## 1. キリスト教教育とは

### 1. キリスト教教育の目的

キリスト教教育とは、人間の形成と変容であり、信仰に基づく人間教育である（Kurato, T., 1998; 倉戸, 1998, 1999）。そして、キリスト教的人間論より、その教育の目標は、人間の原像をキリストに求め、原像へと形成することであるといえる。たとえば、バルト（1974）は、「人間の原像をキリストに求め、この原像へと形成する」のが教育であると主張している。そして、彼は、その教育の目的は原型・目的像に求めている。その理由は、「福音は神についての音信であり、福音が神について語ると同時に、引きつづいて人間についても語っている」と考えるからである。彼によれば、「形成とは、全体としての人間が非形成的な材料から、一つの像に形造られ、形が与えられ、鑄造される」ことである。

また、小樋井（1996）は、「キリスト教教育の目的は、原像をキリストにおいて見ることであり、人間をこの原像の模像として形成することである」と指摘している。しかもその像の内容をインマヌエルとして捉えている。すなわち、神は人間一人一人と共にあり、この対応において、人間はすべて他者と共に成り立っていると考えるのである。そこで、彼は、「イエスこそ、まさしく形成され、教育された人間である。われわれはイエスに完全に合致するなどということはありません」

\* 本学保育科助教授（心理学）

\*\* 神戸親和女子大学児童教育学科教授（教育心理学・キリスト教教育学）

得ないことであるが、わたしたちは形成されていない状態から、形成された状態へと教育で変えられ、一步一步接近することを神が導いてくださる。」と語るのである。

## 2. キリスト教的人間論からの人間とは

### 2-1. 神のかたちである人間

人間は神のかたち、似姿である。それは、人間は神により、神にかたどって造られた存在であるからである。

「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものとの治めさせよう(創世紀1.26-27)」と記されているように、神は自分のかたちに人間を創造されたのである。言い換えれば、人間は、神によって、神に似せて創造されたのである。このことを佐藤(1993)は、「人間は三位一体の神に似せて造られたのである。それゆえに、人間は、意志と計画をもって存在し、それゆえ、人格として造られている」と述べている。かたち(ツェレム, image)は人間の本質を示している。それは、知性や自由意志を含んだ理性、すなわち、人間性の領域である。そして、かたどって(デームス, likeness)は、似姿とも表現される。似姿は神の特別な意志としての原義(justitia originalis)を表している。かたちと似姿との区別については、いろいろと論議されているが、カルビン(Calvini, J., 1957)が主張するように、かたちと似姿との二つの意味を含むものである。そして、どちらも、肖像、写し、輪郭というような意味として考えるべきである(吉岡, 1994)。

さて、人間は神によって創造された。しかし、人間は神そのものではなく、神の被造物に過ぎないのである。しかし、「愛といつくしみのあるところに神おわす」と記されているように、神は愛そのものである。それゆえ、この限りない愛により、人間は造られたのであり、神は限りなく人間を愛してくださるのである。たとえば、相良(1985)は、「神がおのれの姿に似せて人間を造られたということは、この限りない神の愛に基づくものであり、そこには限りない神の人間に対する愛がある」と指摘している。そして、「造られたのは肉体と霊魂である。肉体は両親によって与えられ、霊魂、すなわち、精神は神から与えられる」と述べている。しかし、彼の主張に対して、佐藤(1989)は霊魂と精神とを区別する必要があると指摘

している。

さらに、神に創造されたとは、神によって生かされ、用いられる人間であるという意味である。たとえば、小島(1977)は、「神から、生きる意味と価値とを与えられて生きる人間という意味であり、この神から与えられた価値と意味とを具体的に実践するために、人間は被造物で在りながら、創造者として、この世界における創造行為を許されているのである」と述べている。そして、神によって造られたゆえに、神のみを神とし、この世のすべてのものを相対化し、ある種の自由と平等の在り方が成立するといえる。たとえば、ニーバー(Niebuhr, H. R., 1956)は、「ある種の平等主義が普遍的社会のなかで、個人個人、共同体、文化の間だけではなく、存在の秩序の間にも行き渡らなければならないのである。物質と精神、理性と肉体、自然と超自然は、ひとつの源泉に由来し、高低もなく、何らの存在の階層的秩序にもかかわりなく、かえって、すべての秩序の存在が尊敬と理解と奉仕とに値し、他方、それらが他のもののしもべであるという唯一の共同体において、相互に結合するのである」と述べている。

人間は神によって造られたものであり、神のかたちに似せて造られた人間は、「明日のことを思いわずらうな(マタイ6.25-34, ルカ12.22-34)」と記されているように、どんな逆境にあらうとも、くじけることなく、神にすべてをゆだね、神の計画のままに喜びと希望をもって生きる在り方を探求する必要があるのである。なぜならば、神がすべてのものを配慮してくださるからである(マタイ6.26, 30, 32-33)。したがって、神を信じ(マタイ6.30)、まず、神の国と神の義を求める(マタイ6.33)なら何も思いわずらう必要がないのである(マタイ6.33-34)。そして、バルト(1951)が指摘するように、神から与えられた力により、その力に応じて生き、用いられるべきである。この言葉は、バルト(1951)が「神の恵みのうちに、積極的に準備され、努力されるべきである」と訴えているように、積極的で、主体的で、かつ具体的な在り方に基づくものである。

### 2-2. 原罪を負う人間

人間は原罪を負う存在である。それは、人間は、神から自由を、意志を与えられ、そして、善悪を自らの判断において選択し、それに基づく特定の役割と責任が在るからである。

原罪とは、アダムが自己の意志にしたがって、ひと

つの選択をした結果、生じた責任である。それは、神の戒めにそむいた責任であり、神の恵みの欠如、喪失につながることである。それゆえ、人間は、あらゆる弱さ、醜さをもち、そして、死があるのである。それは、人間がこの世に生を受けると同時に持つ罪悪である。たとえば、相良（1985）は「原罪とは、悪や罪への傾向であり、これこそ人間がこの世に生存するかぎり、業として負っていかねばならない、いわば宿命的なものである」と述べている。しかし、人間は、原罪の基にあるが、以前として神の恵のうちにあるのである。たとえば、カルヴァン（1973）は「この墮罪の基にある、神の形を喪失した現実の人間には、地上のことがら、すなわち、日常的・市民的・文化的なことがらについては、文化の営みの基礎になる人間の知性や意志の働きの、その罪の結果、大いに、腐敗し、ゆがめられているけれども、なお、神の寛大さにより、その相対的な意味と価値とが認められる」と記述している。

人間は、この世に生存するかぎり、原罪を負って生きなければならない。しかし、神はそのひとり子をこの世にくだし、それをあがなわれたのである。すなわち、イエス・キリストの死と復活は、神の計画なのである。この計画は、神が、イエス・キリストを死人のなかからよみがえらせたこと、そして、神が、よみがえらせた方であることを示している（使徒2.24,32,36,3.15,4.10,5.30,13.33-37,17.31,26.8,ローマ4.24,8.9-11）。バルト（1953）によれば、神の計画により、先天的にキリスト者になるように人間は心情、意欲、努力などがそなわっていると述べている。そこで、イエス・キリストと人間の共存において、潜在的にすでに新しい人になるという在り方が問われるのである。すなわち、召され、用いられ、証し人となることである。それゆえ、感謝のうちに希望と喜びを見だし、自らの器に合うように生かされ、用いられるよう勤める人間の在り方があるのである。それは、「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を改めていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なものであるかをわきまえるようになりなさい（ローマ12.2）」と記されているからである。そこで、神の意志がなんであるかを絶えず問いつづけ、試みなければならないのである。さらに、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、イエス・キリストにおいて、神があなたがたに望んでおられることです（Iテサ5.16-18）」と記さ

れているように、イエス・キリストの十字架の苦難と死が、復活の喜びと勝利へと神により変えられるのである。それゆえ、失望をもたらすような状況であっても、いつも神が共におられることにより、希望を、喜びをもって生かされ、用いられる在り方が求められるのである。これはキング（King, Jr. M. L., 1963）が「有限の失望は受け入れよう、しかし、無限の希望は決してわすれてはならない」と訴えたことに通じるものである。すなわち、ひとつの挫折が、新たな希望の糧になるのである。

### 2-3. 救われる人間

人間とは、原罪を負う存在である。しかし、罪や悪から開放され、救われる存在でもある。それは、神のひとり子であり、この世につかわされたイエス・キリストの仲立ちにより、神が一方的に人間を許し、和解し、救われるからである。

救われるとは、人間の原罪があがなわれるということである。そして、喪失した神の恵みを回復したということである。バルト（1948）は、和解とは、神自身の人間に対する援助であると考えている。それは、「神われらと共にいます」からである。そして、和解の行為としてイエス・キリストの生涯があるのである。それゆえ、和解そのものが神の啓示であるといえるのである。

人間は、原罪を負う存在であるが、パウロによれば、人間はキリストと共に十字架につけられ（ローマ6.6, ガラテヤ2.19）、そして、キリストと共に死に（ローマ6.8, コロサイ2.20）、共に葬られた（ローマ6.3, コロサイ2.12）。そこで、神の恵みを回復し、共に生かされ、共に用いられるのである（ローマ6.8, IIコリント13.4）。さらに、その死のようにひとしくなるなら（ローマ6.5）、彼の復活のようにひとしくなるであろう（ローマ6.5, ピリピ3.10）。それゆえ、イエスの死を自らの身に負うことによって、イエスの命が自らの身に現れる（IIコリント4.10-12）ことになる。現れるとは、イエス・キリストの死と復活を自らのものとして受け止めることである（ローマ6.4,9-11, IIコリント13.4, ガラテヤ5.24,6.14）。そこで、神にすべてをゆだね、神の計画にしたがって、それぞれの歩みをまっとうする人間の在り方があるのである。たとえば、松木（1988）の述べる「無から有るへ」である。彼は「無の無は、決して単なる有るではなく、まさに、新たな有るにほかならない。イエス・キリストの死と復活によって、無から新たな有る

るへ開かれるのである。—中略— 無の無の場が開かれ、そこに立ち、そこで生きることが、キリストの復活の生命を生きるということの意味なのである。キリストと共に生きるとか、キリストの復活のようにひとしくなるとかということも、実際には、キリストの死と復活の出来事によって自己の底に開示された無の無の場で生きること、そして、その場を自覚体認することにはほかならない」と述べている。

#### 2-4. 新しき人を着る人間

人間は、「新しき人を着る」ことができる存在である。それは、復活によって再創造がなされ、新しくされた人間となるからである。

「造り主のかたちに従って新しくされ、真の知識に至る新しき人を着たのである（コロ3.10）」と記されている。ここでのかたちには、創世紀1章27節の神を指している。それゆえ、原義は真の知識であり、義と聖である。しかし、ここでの原義は、アダムが罪を犯したことにより、完全に喪失したのである。そして、それは、神によってのみ回復されるものである。

新しき人は純粹で、罪のない状態、純潔性を意味している。そして、知識は、造り主との生きた永遠的な交わりを含む十分な知識である。義は正しいことを行っていること、正義が要求するものという意味を持ち、さらに、聖は、清いこと、聖性、魂が神によって充滿している時に造りだされた心の状態を意味するのである。さらに、「心の深みまで新たにされて、真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである（エペソ4.24）」と記されている。ここでの真の義と聖の真理はエフェソの信徒への手紙第4章25節に記されている偽りの反対である。すなわち、コロサイの信徒への手紙第3章10節に記されている知識と同じである。したがって、創造者が所有している真理に、人間もまたあずかり、人間もその真理の光を持つようになるのである。そして、光である知識をもって、あらゆる正しい感情と聖を行うのである。すなわち、これが原義の意味する人間の在り方である。そして、原義の回復は、信仰によって魂がキリストと結合し、新しい人へと再生されることによって可能となるのである。

古い人を脱ぎ捨て、新しい人を着るという聖的な内面の変化は、内的な変革から始まり、身体的な再生、いわゆる、復活のからだの再生をもって完成するのである。これは、神による再創造であり、「だれでもキリストにあるならばその人は新しく造られた者であ

る。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである（Iコリント5.17）」と記されていることである。しかし、古い人間性は死滅し、新しい人間性が出現しているが、現実には、古い肉体のままである。それゆえ、人間は、その欲求に悩まされ、葛藤し続けるのである。しかし、「全き人となり、ついに、キリストに満ちみちたる徳の高さにまで至る（エペソ4.13.）」ことを試みつづける在り方が必要である。カルヴァンの絶え間ない創造によれば、この人間の在り方は、行動するために生かされ、自己の役割を果し、神に用いられるために神が創造され、再創造されたのであるといえる。

### 3. パーソナル・スペースの形成と変容について

#### 1. パーソナル・スペースの手法を用いる理由

パーソナル・スペースの手法を用いて人間の在り方を明らかにしたいのは、つぎの理由からである。第1の理由は、パーソナル・スペースが自己の存在を明確にし、さらに、自己と他者との存在関係を明確にするからである。すなわち、筆者らは、パーソナル・スペースは人間が自ら生きられる空間であると考えからである。生きられる空間とは、神の存在と、自己の存在と、他者の存在とを認識し、自己の在り方を成立させる空間である（Lurgat, L., 1982）。第2の理由は、パーソナル・スペースは、自己と他者との存在を明確化し、その存り方の関係を明らかにするからである。すなわち、パーソナル・スペースが人間関係を現すひとつの指標であるからである（Sommer, R., 1969）。具体的にいえば、自己と他者とがどのような人間関係であるかによって、対人距離が決定されるからである（Cohen, R., 1985）。第3の理由は、人間の在り方を実践科学の立場から論究したいからである。それは、キリスト教教育が実践科学のひとつであるからである（Fowler, J. W., 1983）。

#### 2. 実験による検証

パーソナル・スペースの年齢変化を扱った研究には、二つ立場がある。一つは、年齢が高くなればなるほどパーソナル・スペースは大きくなるという主張である（Meisels, M., & Guard, C. J., 1969; Aiello, J. R., 1972; 市橋, 1979）。すなわち、拡大方向を示すという立場である。一方、もう一つは、パーソナル・スペースは、拡大方向へ、そして、ある年齢から縮小方向へと変化するという立場である（Heshka, S., &

Nelson, Y., 1972 ; Hayduk, L. A., 1983)。しかし、両者の主張には問題がある。一つは、対人距離の方向条件が左右条件、もしくは、正面条件の研究が多く、方向性が一定していないからである。もう一つは、対人距離の測定方法が観察法、投影法、実験法と多彩であるからである。

さて、視点を変えて、先の研究（倉戸，1993；Kurato, T., 1998；倉戸，1998，1999）などと比較するとつぎのことがいえる。それは、パーソナル・スペースは、年齢が低い段階では自己中心的な感受性と自己主張を反映し、その後、年齢が高くなるにしたがって、他者を受容した感受性から共感性へ、そして、協調性から自己主張を反映した変化が見られる。これは、パーソナル・スペースが、自己実現過程における対人関係能力差の意味性を反映しているといえる。ここでいう対人関係能力とは、感受性、共感性、協調性、自己主張性のことである（福山，1998；倉戸，1998）。

そこで、本研究では、パーソナル・スペースの形成と変容の意味性について検討する。

#### 2-1. 目的

本研究の目的は、年齢の低い段階におけるパーソナル・スペースが自己中心的な対人関係を反映しているかどうかを明らかにすることである。

#### 2-2. 方法

被験者を年齢により、A群とB群とに分けた。A群は平均年齢5.4歳の41名で（男性20名、女性21名）、B群は平均年齢10.8歳の47名であった（男性18名、女性29名）。モデルは被験者と面識がない子どもたち23名（男性11名、女性12名、平均年齢10.1歳）と成人12名（男性5名、女性7名、平均年齢24.3歳）であった。

対人関係能力の指標は、実験者による自然観察と被験者によるアンケート調査、および、気づきとふりかえりの記録であった。項目は、感受性、共感性、協調性、自己主張性の4因子であった。

認知反応の指標は、不快、緊張、脅威、ストレスの項目に対する被験者による5段階評定であった。

対人距離の指標は、境界地点は、被験者にモデルが接近してきた時に、被験者がこれ以上、近づかれると嫌であると感じた時、あるいは、これ以上、近づかれると気づきであると感じた時、そして、これ以上、近づかれると目をそらしたいと感じた時であった。そして、対人距離は、その被験者とモデルの距離であった。

生理反応の指標は、心拍数と最高血圧であった。心

電図は標準双極肢（CM5）誘導で測定した（NEC, DMC-3252型, D0C-3110型）。血圧は、自動加圧式で測定した（P, EW-272型）。

実験設定は、被接近実験であり、直視条件であった。出発点は被験者から500cm離れた所であり、モデルが被験者に接近する接近行動は、10秒ごとに10cm移動し、30秒ごとに停止した。

方向条件は、被験者とモデルとの対面角度が0度、45度、90度、135度、180度、225度、270度、315度の8方向であった。

#### 2-3. 結果と考察

対人関係能力の結果：対人関係能力の結果を図1に示した。A群は、共感性と協調性より、感受性と自己主張性が顕著に高かった（ $X=211.62, P<0.01$ ）。すなわち、A群は瞬間的で、感覚的な感受性と衝動的、情動的な自己主張性が高いのである。これは、自己中心性の現われである。B群は、自己主張性<感受性<共感性<協調性という関係が見られた。特に、自己主張性が顕著に低く（ $X=237.79, P<0.01$ ）、協調性が顕著に高かった（ $X=253.92, P<0.01$ ）。すなわち、B群は、他者にあわす行動、社会から逸脱しない行動、他者に受け入れられる行動が増加したのである。これは、受身的な、表面的な対人関係の現われである。

認知反応の結果：A群は、すべての時点で各評定とも高い値を示した。その時その場の自己中心性が高く、回りの関係を無視した衝動的な行動と感情表現が多かった。B群は、各評定とも境界地点まで高い値を示し、境界地点で顕著な最も高い値を示した（ $X=299.21, P<0.01$ ）。この結果は、他者を意識し、動揺している現われである。

対人距離の結果：対人距離の結果を図2に示した。パーソナル・スペースは、両群とも卵形の異方形を示した。この結果は、ホルヴィッツら（Horowitz, M. J., Duff, D. F., Staratton, L. O., 1964）と倉戸（1994）の結果と一致した。A群は、315度条件の対人距離が最も大きかった。つぎに、0度条件、270度条件などの左前方方向が大きい卵形の異方形である。B群は、0度条件、315度条件が最も大きい卵形の異方形である。これらの結果は、前方方向、左前方方向からの対人脅威、対人不安の反映である。さらに、両群とも視線の交錯による視覚的接触のために、他者に対する強い心理的対人圧迫が生じたのであろう。しかも、受身的に自己の存在を、自己の空間を取り戻し、維持している。その意味では、他者によりある型の対

人関係基準を強制的に押しつけられた被害者意識があると考えられる。

心拍数の結果：境界地点での心拍数の結果を図3に示した。A群は絶えず高い値で変化した。さらに、境界地点で、顕著な増加現象を示した ( $X=21,8.43, P<0.01$ )。B群では、後者のみに変化があった。心拍数の増加現象の結果は、グラスら (Glass, D. C., & Contrada, R. J., 1983) の結果と一致した。さらに、前方方向と左前方方向の増加は、マクブライドら (MacBride, G., King, M. G., James, J. W., 1965, 1965) の結果と一致した。これらは、ネガティブな感覚的、衝動的な感じ方、感情行動の反映であるといえる。

最高血圧値の結果：境界地点での最高血圧値の結果を図5に示した。A群より、B群の方が境界地点で高い値を示した。そして、両群とも、0度条件、315度条件、270度条件、そして、225度条件において高い値を示した。

## 2-4. 結論

本研究では、2つのことが見出された。第1点は、本研究では、年齢の増加にしたがって、パーソナル・スペースが拡大する現象が見出された。第2点は、それぞれの発達段階に見られるパーソナル・スペースには、生起と変容の意義があることを見出した。すなわち、平均年齢5.4歳のA群の結果は、感覚的、衝動的な自己中心的な対人関係を反映したパーソナル・スペースである。平均年齢10.8歳のB群は、自己主張を抑えた、表面的な対人関係を反映したパーソナル・スペースである。いずれも、他者を受容し、共感し合っている対人関係であるとは言いがたい。

## 4. 全体的な考察、および今後の課題

### 1. パーソナル・スペースを形成する理由

形成するひとつの理由は、自己の在り方を意味づけ、自らを受け止め、受容したいからである。それ

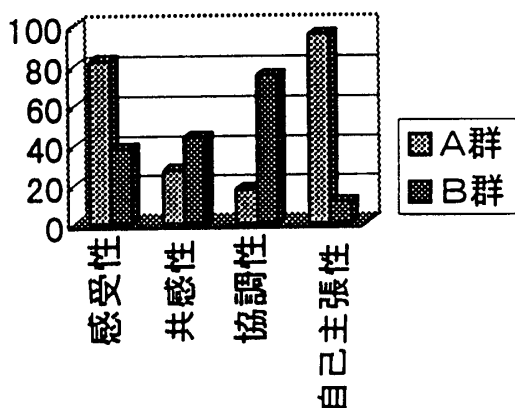


図1 対人関係能力差の結果(%)

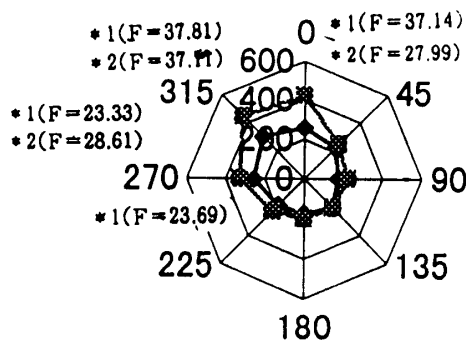


図2 パーソナル・スペースの結果(cm)

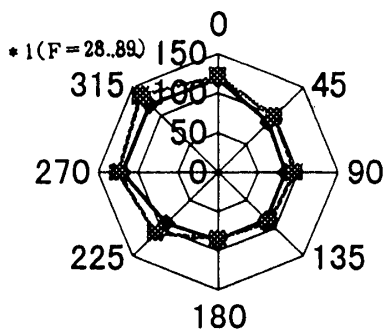


図3 心拍数の結果(bpm)

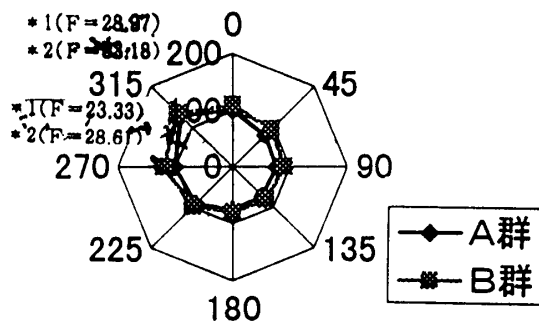


図4 最高血圧値の結果(mmHg)

- \* 1 : 条件間に有意義が見られた場合 ( $P<0.01$ )
- \* 2 : 群間に優位差が見られた場合 ( $P<0.01$ )

は、パーソナル・スペース内では、自己の認識を可能にし、さらに、他者と自己との存在関係を維持できるからである。すなわち、人間らしく行動できる可能性を確保したいためである。たとえば、ソマー（1969）によれば、パーソナル・スペースは、自我を守るための「目に見えない境界線」である。すなわち、自己の存在を確保するための壁であり、空間である。そして、どのようなパーソナル・スペースを確保するかは、自己の存在を脅かす他者の存在、周囲の状況、そして、自己の状態などによつて、決定されるのである。彼は、「人間は、自己の存在を他者の脅威から防衛するために、または、自己の存在を不安から守ためにパーソナル・スペースを確保する」と述べている。

人間が、自己の存在を守り、確保したい理由は、自己が不確かな存在であるからである。不確かさは、自己理解できていないために真の確かさを失い、存在の意味を喪失しているからである。それは、本当の在り方に反し、背く者になっているからである（ルカ 15.11-20）。また、人間は弱さを持つからである。

そこで、その解決のためには、不確かさを、弱さを認識することが自己の在り方を見出す手がかりになる。たとえば、パウロは自分の弱さを自覚し、その弱さが人間の存在を認識する出発点であると語る（Ⅱコリント11.10,13-16）。すなわち、弱さを弱さとして認識し、弱さを持つこと、まず、自己の存在として受け止めることが人間らしい在り方の始めであるという意味である。そして、その試みが、弱さを弱さのままではなく、強められることになる。たとえば、「私は弱い時にこそ、私は強い（Ⅱコリント12.10）」と記されている。これは、自己の存在が、弱さのままに変化するという意味である。すなわち、パウロは、「自分の弱さを誇ろう（Ⅱコリント11.30）」「自分の弱さ以外には誇ることをすまい（Ⅱコリント12.5）」「喜んで自分の弱さを誇ろう（Ⅱコリント12.9）」ということである。それは、チャールズ（Charles, V. W., 1974）が主張した「はじめて、ひとりになる（to be alone）」ということである。

上述のことより、今後のキリスト教教育の課題として言えることは、2つある。第1は、適切な自己理解ができるようにかかわる必要がある。第2は、自己を不確かな存在として、また、弱さを持つ存在としてあるがままに受け止め、弱さを明確化し、自己の在り方を問うことができるようにかかわる必要がある。

## 2. パーソナル・スペースの大きくなる理由

大きくなるひとつの理由は、認知的評価過程に影響する要因が異なるからである。それは、それぞれの人間が持っている認識要因や判断要因が影響するからであり、認識や判断は生まれた以後の学習や経験によるからである。すなわち、今までの人間関係によつてはぐくまれた学習である。たとえば、母子関係などであり、エリクソンの主張する信頼と愛の危機をいかに解決、克服したかによるのである。すなわち、最初から不信任を抱いて他者理解を試みるか、最初から信頼して他者理解を試み、人間関係を創造しようとしているかの差である。その意味では、本実験結果は、自己理解が、他者理解が困難であることを示している。

自己理解、他者理解が適切にできないのは、エゴイズムによる。エゴイズムが、自己の存在を、自己の本来の在り方を破壊しているのである。人間は、自己中心的存在である（ピリピⅡ.2.21）。たとえば、自分が第一であり、何よりも、自分が中心である。それは、「欲のために肉に心を向ける（ローマ13.14）」に記されている行動である。その行動は、自己から本来の在り方を奪い去り、不可能にするのである。それは、「肉の欲を満たす（ガラテヤ5.16）」だけである。そして、「肉の欲するところは、御霊に反し、また、御霊の欲するところは肉に反する（ガラテヤ5.17）」であり、そこでは、霊を必要としないのである。

さて、「肉に従う者は、肉のことを思う（ローマ8.5）」に記されている肉とは、肉体のみではなく、それを含む人間そのものを指している。肉に従うとは、人間が人間に従うことである。そして、パウロによれば、「肉の思い（ローマ8.6）」と化すことは、霊の思いと対立して、死に向かうことである。それゆえ、神に敵し、神に喜ばれることがないのである（ローマ8.8）と訴えるのである。

そこで、その解決のためには、肉的な在り方と対決し、自己を認識する必要がある。それは、「イエス・キリストに属する者は、自分の肉をその情と欲と共に十字架につけてしまった（ガラテヤ5.24）」と記されていることである。人間は、肉的な在り方を捨て、自己の本来の在り方を問い、神と自己との関係を認識する必要があるのである。

大きくなるもうひとつの理由は、自分で心をせばめているからである。それは、自由を捨て、意味づけ、価値づけることをやめたからである。自由であるということは、自分を創造するという意味である。すなわち、自ら意味づけする存在として自由なのである。それは、自己の存在認識、神の存在認識、そして、その

関係の認識を追求して、得られることである。人間は、神と共にあって自由である。しかし、実は、自由ではない。かえって、束縛されて、囚われている。

肉的な在り方を、この世のしがらみを捨てた時に、すべてのものから自由になるのである。それは、確かさのうちに生きることであり、自己の存在を認識し、エゴイズムを克服することによって、その自由が得られる。その克服は、人間の存在が有限であり、相対であるという自覚からはじまる。それは、シューナク (Schunack, G., 1967) によれば、「自己のわざにおいて、自己を自己自身の根拠にする」ことの気づきである。すなわち、自己に頼み、自己に信頼を寄せる自己信頼に基づく在り方に陥っていることを認識することである。そして、自由とは、自己がキリストの死と復活に即してのみ自由である (ローマ8.2) ことを認識することである。パウロによれば、キリストの奴隷 (I コリント7.22)、義に至る従順の奴隷 (ローマ6.16)、義の奴隷 (ローマ6.18-19)、神に仕える神の奴隷 (ローマ6.22,7.6)、そして、神に自己を捧げる者 (ローマ6.13) としての自由である。この自由を得るためにその認識と自己の在り方の問いかけが必要である。

そこで、その解決のためには、心を開けることである (コリントII.6.13,7.2)。開けるためには、自ら開けないで、閉じていることを、まず、認識することである。すなわち、開けないのは、エゴイズムによって、人間が自ら行っていることである (コリントII 6.12)。エゴイズムは「かたくな (出エジプト7.13,8.15, マタイ19.8, マルコ3.5,10.5,16.14, ローマ2.5, 11.5,7,25,使徒19.9)」と記されていることである。

さらに、大きくなるもうひとつの理由は、他者のある価値観などを押しつけられたからである。言い換えれば、受動的に自分でない在り方を形成したのである。すなわち、まわりに合わず在り方である。すなわち、まわりに合わず在り方は、自分をこの世に合わせた生き方である。たとえば、この世の動くままに動かされ流されるとか、環境や世間の風潮や社会の風潮に安易に引きずり振り回されるとか、この世の常識や価値観などに堅く囚われるとかである。それゆえ、周囲の人たちと同じように信じ、同じように考え、同じことを言い、同じように行動し、同じように生きるのである。いわゆる「心身の分裂 (mind-body split)」が生じているのである。それは、この世に自己をゆだね任せるからである。この世に、自己をゆだね、任せるとは、「世からある (ヨハネ8.23,15.19,17.14,16,18,

36)」というあらわれである。言い換えれば、人間は、世にあるから、世に自己をゆだねたのである。そして、人間関係では、この世の他者にあわせることであり、この世の他者に頼り、依存することである。これらの行動は、ブルトマン (Bultman, R., 1968) によれば、「人間は、自己と自己の生をこの世から理解し、この世に基づいて自己の確かさを得ようとする」ことである。そして、この確かさを得ることは、「この世の知恵 (I コリント1.17-2,16) の所産」であり、それを自己の存在の根拠とすることである。しかし、この存在の根拠に従うことは、「この世のもろもろの霊力に縛られる」ことである。そして、この世の奴隷になることである。たとえば、エベリング (Ebeling, G., 1979) によれば、「この世は、人間を奴隷化する超主体的な力」である。それゆえ、ブルトマン (1968) は、「この世は各個人の配慮と行為とによって構成されているのであるが、それが逆に各個人を支配するものになる。—中略— すべての各個人の主体の上に、世が独立の主体として成立するのである」と警告した点である。

上述のことより、今後のキリスト教教育の課題として言えることは、3つあると考えられる。第1は、肉に支配され、肉に従う存在として、あるがままに受け止められること。そして、それがエゴイズムによることを自覚し、自己の在り方を問えるかわりが必要である。第2は、自ら心を狭め、閉じていることを認識し、肉のうちに在る自己を発見できるかわりが必要である。第3は、人間は受動的な存在であることを認識し、責任回避することなく、主体的に行動できるかわりが必要である。

### 3. パーソナル・スペースの大きさの差が生じる理由

大きさの差が生じるひとつの理由は、自己の存在、他者と自己との存在関係を思いわずらったからである。思いわずらうとは、思い悩む、思い苦しむ、思い病むということである。「何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。・・・だから、あすのことを思いわずらうな (マタイ6.35-34, ルカ12.22-34)」と記されているとおりである。記されていることは、根本的な問題について思いわずらうなどということである。なぜならば、神がすべてこれらのものを配慮しているからである (マタイ6.26,30, 32-33)。それなのに、なぜ、あなたがたは思いわずら



うのかということである。それは、人間が、神を信じ（マタイ6.30）、まず神の国と神の義を求めるなら（マタイ6.33）ば、何も思いわずらう必要がないからである（マタイ6.33-34）。何も思いわずらう必要がないのは、このような神と自己との存在関係があるからである。思いわずらいからは自由であるとは、松木（1988）によれば、「思いわずらう日常のいろいろなものからの自由である」ということである。

大ききの差が生じるもうひとつの理由は、人間が自己の主体性を失っているからである。主体性を失っているということは、現代の多くの人間が、時間的な忙しきのなかで、時間の不足を嘆き、時間のゆとりのないことに不満を抱いている。すなわち、自己が存在していると感じられる時間がないのである。あるいは、自己が存在している時間を感じないようにしているためとも思われる。そして、現代の人間の多くは、時間がないという理由で、受動的に行動し、対人関係を豊かにする時間をおろそかにしている。すなわち、「完全にそこに存在すること」の気づきができていないからである（Charles, V. W., 1974）。気づきができないとは、人間が時間に囚われていることである。そして、囚われていることにより、時間に対する適切なかわり（エペソ5.16、コロサイ4.5.）ができないのである。適切なかわりとは、自ら主体的に時間を活用し、用いることである。

主体性のない、受動的な行動とは、自己を犠牲にしているのである。あるいは、自己を自らの手で殺しているのである。すなわち、自己の存在を自ら放棄し、そして、自らの在り方を考えないようにして、ただ、その時を肉に支配されるのである。さらに、それは、あるがままに、素直に自己を主張したり、主体的に振る舞ったりする自分をしまいこんでいるからである。しまいこんでいるとは、自分らしきを隠すことである。同じく、自分を自ら偽っていることでもある。

さらに、大ききの差が生じたもうひとつの理由は、人間が、自己中心性が高い存在であるということを知識していないからである。人間は、神に従い、神に即して、神中心の在り方を求めている存在にならなければならない。しかし、人間は、自己に従い、自己に即する自己中心な在り方へ転倒している知識がないといえる。たとえば、自己を誇るという態度である。自己を誇るとは、自己中心な存在として知識することである。あるいは、人間が、自己を中心化し、自己を誇ることである（イザヤ2.12,13,11,16,6, エレミヤ9.23,48,82, マルコ7.22, ローマ1.30, コロサイ2.18）。

そこで、その解決のためには、人間は、自己の存在を問ひ続け、パウロが指摘したこと（コリント4.6, 18,19,5.2）を自ら受け止める必要がある。そして、「あなたの持っているもので、もらっていないものがあるか。もしもらっているなら、なぜもらっていないものように誇るのか（Iコリント3.7）」と記されていることを知識する必要がある。それが出来ないことは、「あなたがたは、すでに満腹しているのだ。すでに、富み栄えているのだ。わたしたちを差しおいて王になっているのだ（Iコリント4.8）」であり、自己本来の在り方から飛躍し、自己以上になることである。それは、自己が自己を見失い、本来ある自己の存在価値を知識していないことになる。そして、パウロによれば「肉を頼みとする（ピリピ3.3）」ことであり、自己を信託することである。それは、神への信託と対立することを意味するのである（ピリピ3.3,7-9）。

パウロは、人間が神や霊に対立する存在であることを指摘している（ローマ1.3,2.28,4.1,7.5,18,8.8-9, Iコリント10.18,15.50, IIコリント7.1, ガラテヤ1.16,4.23,29,6.8）。人間は、人間的なものにしがみつきの、真実のものに対して心を閉ざしている存在である。真実のものとは、神や霊である。そして、自己を閉鎖し、自己中心的にかかわっている。

上述のことより、今後のキリスト教教育の課題として言えることは、3つあると考えられる。第1は、人間は、絶えず思いわずらう存在である。しかし、神が、すべて配慮してくださっていることを自ら知識できるかわりが必要である。第2は、自ら主体的な生き方、在り方が問えるかわりが必要である。第3は、人間は、自己中心であることを知識し、神と自己との存在関係を問えるかわりが必要である。

## 引用文献

- バルト, K. 1949 井上良雄訳 啓示・教会・神学  
新教出版社
- Barth, K. 1951 Die Kirchliche Dogmatik, IV/3.
- Barth, K. 1953 Die Kirchliche Dogmatik, IV/1.
- Bultaman, R. 1968 Theologie des Neuen Testaments, Tugbingen.
- Calvini, J. 1973 Institutes of the Christian Religion. I, II. (ed.) J. T. McNeill. The Westminster Press.
- カルヴァン, J. 1973 渡辺信夫訳 キリスト教綱要 I 新教出版

- Charles, V. W. 1974 Sensory awareness. Ross-Erikson, Inc., Santa Barbara.
- Cohen, R. 1985 The development of spatial cognition. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Ebeling, G. 1979 Dogmatik des christlichen Glaubens III. Tuingen.
- Glass, D. C. & Contrada, R. J. 1983 Type A behavior and catecholamines: A critical review/In C. R. Larke. & Ziegler (Eds.) Norepinephrine: Clinical aspects. Baltimore: Williams and Wilkins.
- Hayduk, L. A. 1978 Personal space: An evaluative and orienting overview. Psychological Bulletin, 85, 117-134.
- Hayduk, L. A. 1983 Personal space: Where we now stand. Psychological Bulletin, 94, 293-335.
- Heshka, S. & Nelson, Y. 1972 Interpersonal speaking distance as a function of age, sex, and relationship. Sociometry, 35, 491-498.
- Horowitz, M. J., Duff, D. F. & Stratton, L. O. 1964 Body-buffer zone: Exploration of personal space. Achievea General Psychiatry, 11, 651-656.
- 市橋秀夫 1979 比較行動学的見地よりみた精神分裂病の精神病理：ナワバリ行動障害の問題を中心に 精神神経学雑誌 81-9, 587-605.
- Lurgat, L. 1982 Espace vécu et espace connu a lecole maternelle. Paris. Lesediyion ESF.
- King, Jr. M. L. 1965 蓮見博昭訳 汝の敵を愛せよ 新教出版社
- 小島一郎 1997 キリスト教大学の神学的基礎づけ 試論 学校伝道研究会(編) キリスト教学校の再建 教育の神学第二集 聖学院大学出版
- 小樋井 滋 1996 バルト神学と宗教教育 ヨルダン社
- 倉戸ツギオ 1993 今を、ウエルネスに 荒木紀幸(編) 生きることへの心理学 ナカニシヤ出版 144-147.
- 倉戸ツギオ 1994 発達と学習の心理学 一自己教育力をはぐくむ一 ナカニシヤ出版
- Kurato, T. 1998 A study on the Tasks of Christian Education — A Quest for Humanity through the Personal Space Approach — Unpublished doctoral dissertation, St. Charles University.
- 倉戸ツギオ 1998 キリスト教教育の課題を求めて — パーソナル・スペース (対人距離空間) の手法を用いて人間らしさを探る — 中部女子短期大学紀要 第28号.
- 倉戸ツギオ 1999 パーソナル・スペースから社会化を探る 日本発達心理学会大10回大会論文集
- 倉戸ツギオ 1999 パーソナル・スペースから社会化を探る 児童教育学研究 第18号 27-50.
- 松木真一 1988 人間存在の探究 — キリスト教人間論の根本問題 — 創元社 p. 6.
- McBride, G., King, M. G. & James, J. W. 1965 Social proximity effects on galvanic skin response in adult humans. Journal of Psychology, 61:153-157.
- Meisels, M. & Guard, C. J. 1969 Development of personal space schemata. Child Development, 40, 1167-1178.
- Niebuhr, H. R. 1956 Christ and Culture, Harper & Bro. Pub., New York.
- 佐藤陽二 1993 えくれしあ 445
- 佐藤陽二 1989 キリスト教とは何か 聖文舎 p. 7-8
- Schunack, G. 1967 Das hermeneutische problem des todes. Im Horizont von romer 5 untersucht (HUTh 7) Tubingen.
- Schleimacher, E. W. 1957 Padagogische Schriften, II, Dusseldorf und Munchen. S.
- Sommer, R. 1969 Personal Space: The behavioral basis of design. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- 相良惟一 1985 教育改革の基底にあるもの — キリスト教教育を追い求めて — 中央出版社
- 吉岡良昌 1994 キリスト教教育 — 信仰に基づく人間形成 — 聖恵授産所出版部